

ロシア刑事探偵のフォークロア ——ワイネル兄弟『恩恵の時代』を中心に——

桜井厚二

はじめに

都市フォークロア Urban Folklore（巷談、噂話等）と呼ばれるジャンルには、都会の片隅に現れる幽霊の怪談や、金持ちから金品を奪って貧者に与える義盗伝説など、国際的にさまざまなモチーフが存在する。本論では、そうしたフォークロアのなかでもわが国や欧米文学に共通して見られるヒーロー／アンチヒーローとしての刑事探偵像の、ロシアにおける展開に着目して具体例を取り上げ、欧米の類例と比較対照し、展望する。（これは筆者のドストエフスキー研究から続いている都市フォークロア研究およびソ連文学研究の発展として構想・考察されたものである。）¹

論述は現代からロシアのフォークロア文化を時代的に遡り、再び現代に回帰して意味づける形で進められる。

1. ロシアのヒーロー探偵像

数年前、ロシア内務大臣が国内人気探偵小説作家たちと会談し、「肯定的ヒーロー」としてのロシア警察官像をもっと社会に普及させてくれるよう、要請したという話が報じられたことがある。

「ロシア内務大臣ボリス・グレイズロフ、国内の人気探偵小説作家たちと会談」

「…」内務省の調査によると、テレビ視聴者がブラウン管を通して目にする殺人シーンは年間3万以上にのぼり、未成年者の殺人事件はしばしばテレビドラマの内容に触発される傾向がある。また年間に発表される約200作の探偵小説のうち、警察官が肯定的ヒーローとして描かれていたのは7作品にすぎなかった。

グレイズロフ：「ロシア市民社会で文学は現実の指針として扱われており、大部分の人々は書物に則して生活しようとする」。内務省と文学との連携について合意が成立すれば、人気探偵小説の紙面に誠実で頼もしい警察官が増加し、残酷な描写が減少することだろう。[…]

グレイズロフ：「あなた方、作家の共同体は、犯罪学研究で為し得ないような正義の規範を創

¹ 桜井厚二『現代用語としてのドストエフスキー』東洋書店、2000年。同「ソ連スパイ小説の神話」『ロシア語ロシア文学研究』35号、2001年、9-15頁。

り出すことができる」[…]

アルカージ・ワイネル（作家）：「社会道德の退廃ぶりは目に余るものになってきている。社会の道德的退廃は、国を傾ける元凶だ」

良識的な犯罪読物を振興する見返りとして、内務大臣は省内の記録資料を探偵作家たちが参照する上で便宜を図ることを約束した。²

ここで名前が挙がっているアルカージ・ワイネルはゲオルギー・ワイネルと共に「ワイネル兄弟」として知られ、ソヴィエト時代の探偵小説界を代表する大御所作家の一人であり、代表作『恩恵の時代 Эра милосердия (1976)』は『待合せ場所を変えてはならない Место встречи изменить нельзя (1979)』という題名でTVドラマ化され、国民的人気を博した。作中に登場する特捜班長ジェグロフ大尉はロシアにおける「ヒーロー警官」のイメージの、大きな源泉になっている。

視聴者の心を真底から掴んだ刑事ドラマはスタニスラフ・ゴヴォルヒン監督の『待合せ場所を変えてはならない (1979)』だった。[…] この作品は斬新な警官像を造り上げた。ヴィソーツキー演じるジェグロフ大尉は世情に通じており、独自の信念をもち、決断に迷いがない。[…] 「悪党は必ずブチ込んでやる」というドラマのキャッチフレーズは、法律よりもむしろ一般道徳感情的な、ロシア的正義の真髓を表明している。ちなみにこのフレーズはロシアで最もよく知られた映画台詞の一つとなり、近年のTVドラマでも頻繁に引用されている。³ (下線引用者。以下の引用における下線はすべて同じ)

ソヴィエト時代以来の現代ロシア探偵小説における「法と正義の対立」のモチーフを分析したアンソニー・オルコットも、際立ったロシア的特徴の一つとして主人公の「遵法精神の希薄さ」を指摘している。

探偵小説に示されているように、ロシア人は善悪について鋭い感性を備えているが、この両概念を表現する用語を見ると、西欧的感性を備えた読者は困惑を覚え、矛盾さえ感じるかもしれない。ジャンル自体が肯定的主人公に白紙委任状を与えて、ありとあらゆる行為を許容しているようには見受けられないが、とはいえ主人公に委ねられている行動の類は、西欧的標準に照らして見るとかなり奇異に映りかねない。先述のように、主人公たちは時に人を欺き、証拠品を窃取し、詭計をめぐらして、市民を物理的に脅かす。⁴

² 2003年10月15日ロシアORTテレビのニュースより。[http://www.1tv.ru/owa/win/ort6_main.main?p_news_title_id=60056&p_news_razdel_id=6] 2007年4月11日閲覧。

³ Elena Prokhorova, “Can the Meeting Place be Changed? Crime and Identity Discourse in Russian Television Series of the 1990s,” *Slavic Review* 3 (2003), p. 515.

⁴ Anthony Olcott, *Russian Pulp: The “Detektiv” and the Russian Way of Crime* (Lanham, MD: Rowman and Littlefield, 2001), p. 114. この他、19世紀から現代に至るロシア探偵小説の特徴に関しては以下の文献が詳しい。久野康彦『革命前のロシアの大衆小説』（東京大学博士論文）2003年9月；毛利公美「現代ロシアの探偵小説」『現代文芸研究のフロンティア I』スラブ研究センター（研究報告シリーズ70号）2000年、59–67頁。

しかしながら、ここで言及されている「西欧的標準」とは、狭義の所謂「本格推理小説」の肯定的主人公だけが念頭に置かれているように見受けられる。広義の探偵物語を視野に入れるならば、シャーロック・ホームズからハードボイルド小説、あるいはハリウッドの活劇映画に至るまで、「法と正義の対立」は西欧でも馴染み深いモチーフの筈である。

「法律よりもむしろ一般道徳感情的なロシア的正義」の体現者としての刑事探偵のイメージは、わが国にさえ存在する。社会心理学者岩男寿美子は、国内 TV ドラマの傾向を分析して、以下のような（フィクションの）刑事探偵主人公のイメージを抽出している。

[...] そこであらためて主役級のキャラクターと脇役キャラクターの描かれ方を概観してみると、主役（特に男性）は、人間としては魅力的だが、警察組織の中には順応していけないアウトロータイプとして描かれている場合が多い。視聴者があらかじめもっている「現実にはテレビの世界ほどうまくいかない」という現実感覚も重なって、こうした理想的警官像は「御伽噺の例外」として認識され、市民の警察イメージ形成には影響を与えにくいのだと考えられる。⁵

現代ロシアの肯定的探偵イメージの大きな源泉たるジェグロフ大尉は、岩男の指摘するようなまさに「人間としては魅力的」だが、ややもすると、過剰なまでの正義感ゆえに公僕として一般に期待されている規範を逸脱してしまう「アウトロータイプ」の探偵でもある。以下、その点を具体的に詳述してみたい。

2. ワイネル兄弟『恩恵の時代』：ジェグロフ - シャラーポフ

『恩恵の時代 Эра милосердия (1976)』の梗概は、以下のようなものである。

1945年、第二次世界大戦から復員した元地下工作員シャラーポフ上級中尉は、モスクワ警察本部凶悪犯罪特捜班の刑事として採用される。敏腕探偵のジェグロフ大尉が率いる特捜班は、現場に必ず黒猫の絵を描くか、生きた黒猫を残すことから「黒猫」と呼ばれる神出鬼没のギャング団と死闘を繰り返していた。赴任早々シャラーポフは特捜班による「黒猫」団への潜入捜査を手伝わされるが、潜入を試みた刑事はあっけなく殺害される。シャラーポフは特捜班の仲間たちに温かく迎えられ、婦警のシニーチキナ伍長と恋に落ちるが、息つく間もなく特捜班に医学者グルジェフ夫人殺害事件が舞い込む。状況証拠からジェグロフは夫を犯人と確信して拘留するが、シャラーポフは冤罪ではないかと疑い、ジェグロフの強引さに反発を覚える。一方、夫人の持ち物だった装飾品がモスクワ暗黒街で発見された事から、特捜班が流通経路を追跡するうちに、フォクスという名で暗黒街に知られている男の存在が浮上する（黒猫に狐という寓意か）。折しも「黒猫」団のアジトを探索していた刑事たちがフォクスの襲撃を受けて死傷する事件が起きた。必死の捜査の末にフォクスは逮捕され、グルジェフは釈放される。シャラーポフはそれまでの捜査で明らかになっ

⁵ 岩男寿美子「21世紀の警察と市民の安全意識：警察と市民の望ましい関係形成をめざして」[http://www.syaanken.or.jp/02_goannai/01_bouhan/bouhan1103_01/bouhan1103_01.htm] 2007年3月4日閲覧。

たフォクスの交友関係を利用して、フォクスの友人という触れ込みで再び「黒猫」団に潜入捜査を試みる作戦を特捜班に提案、自ら志願する……

梗概からも窺えるように、ジェグロフ大尉にはシャーポフ上級中尉という相棒が伴っており、両者で一对の主人公となっている。この点は「シャーロック・ホームズとワトソン博士」と同様、ジェグロフのイメージを考察する上で重要である。

ジェグロフの人物像をよく表す例として、グルジェフの無実を主張するシャーポフに対し、ジェグロフが次のように怒鳴りつける場面がある。ちなみに「悪党はぶち込んでやる」という有名な台詞も、ここで出てきている。

「弱腰になるなシャーポフ。ここは首都警察だ、わかるか？ 首都警察は女学校と違うぞ！ ソヴィエト市民の婦女が殺された。犯人を野放しにしてたまるか。断然ぶち込んでやる」

「でもグルジェフは……」

「俺がぶち込んでやると言ったら、ぶち込んでやるのさ！ フォクスの仕業とわかったら釈放してやる、それだけのことだよ、シャーポフ上級中尉。全責任を負うのは俺一人だ。お前は上司の命令に服している」

[…] 私はジェグロフを見つめた。彼が再び窓辺を向くと、大きな背中がすっかり窓を遮った。私は彼の剽軽さ、敏腕さ、勇猛さ、度外れた硬骨漢ぶりを思い返していた。

「我らがジェグロフは鉄の男だよ」といつかコーリャ・タラスキン刑事が言っていたが、確かにその通りではあった……⁶

物語の結末、「黒猫」団に潜入したシャーポフは、一味の中に軍隊時代の戦友レフチェンコの姿を認める。身元が暴かれればシャーポフは絶体絶命の窮地に陥るところであったが、レフチェンコは彼を庇い秘密を守った。シャーポフに唆され商店に押し入った一味が、待ち伏せていた警官隊に検挙されたとき、レフチェンコは逃走を図ってジェグロフに射殺されてしまう。シャーポフの抗議を、ジェグロフは冷然と突っぱねる。

「あんたは人を殺した」力なく私は言った。

「ギャングをぶち殺してやったよ」ジェグロフは薄笑いを浮かべた。

「あんたが殺した男は、私の命を救ってくれた恩人だぞ」

「でもギャングには違いなかつただろ」ジェグロフは口調を和らげて答えた。

「彼が私についてここまで来たのは、一味を引き渡すためだった」私は穏やかに言った。

「なら逃げたりしなきゃ良かった。発砲に際して一々警告はしないとっておいたのに」

「あんたは彼を殺した」私は執拗に繰り返した。

「ああ殺したさ。悔やむつもりはないね。奴はギャングだ」ジェグロフはきっぱりと言った。⁷

⁶ Вайнер А., Вайнер Г. Эра милосердия; Я, следователь... М., 1990. С. 292.

⁷ Там же. С. 387.

3. 刑事探偵 - スパイ - 否定的ヒーローとしてのイメージ

ここでロシア・フォークロアの古例に遡り、伝説的ヒーローでありながら否定的側面も併せ持っている、という型の刑事探偵像が脈々と受け継がれてきた様子を概観してみたい。

3-1. イワン雷帝

プロップによれば、捕物についてのフォークロアとしては、最古のものとしてランプシニタス王と、その宝蔵に細工を仕掛けた大工の一族との知恵比べを描いた「ランプシニタス王の宝蔵」が知られており、その系譜に連なるロシアの類話として、イワン雷帝と盗賊の民話が知られている。

どろぼうの名人の昔話でわたしたちが知っているもっとも古い記憶はランプシニタス王の宝蔵にまつわる、古代エジプトの昔話であり、これについては一度触れておいた。エジプトを訪れたヘロドトスはこの昔話を自著『歴史』に引用している。[…]

雷帝にまつわるもうひとつの昔話がアレクセイ・ミハイロヴィチ皇帝の医師であるイギリス人サムエル・コリンズの著書の中に残されている。[…] ヴェセロフスキーに従って引用してみよう。「ときどき変装したイワン雷帝はどろぼうの一味に加わり、彼らに官金保管人のところへ盗みに入るようにすすめる。『わたしがおまえたちに道を教えよう！』と彼はいった。ところがどろぼうの一人がこぶしを振りあげて彼の顔を力いっぱいなぐった。『ろくでなしめ！ よくもおまえはおれたちに対してさえあれほど寛容な陛下のものを奪おうなどといえたものだ。それよりも、王様の官金を横領している金持ち貴族から略奪するほうがいい』」。

これが昔話のテキストでないことはことばからすぐにわかる。コリンズはじぶんが耳にしたことを書き記している。この話には一群のどろぼうの名人の昔話とは関係のない続きがある。皇帝はそのどろぼうと帽子を交換し、宮殿の広場で待っているように命ずる。どろぼうがやってきて、話をした相手が当の皇帝だったことを知る。皇帝は彼にウオッカの杯と蜂蜜を褒美にやり、彼を自分の下僕にし、彼の助けを借りてどろぼうの一味を摘発する。

これはまぎれもなく昔話であり、そのことは十九世紀にその類話が記録されていることからわかる。⁸

上記のイワン雷帝の昔話には、探偵に関する否定的イメージの源泉となり得る三つの要素が現れている。一つは、素性を偽っての潜入捜査というスパイ的な活動であり、二つ目は盗賊にわざと犯行を唆す「挑発」工作、三つ目は「前科者の活用」である。ワイネル兄弟の『恩恵の時代』においても、元地下工作員シャラーポフが「黒猫」団に対する潜入捜査としてこの三つを実践しているが、ただし前科者レフチェンコは赦されることなく、「ロシア的正義」の体現者ジェグロフによって処断されてしまうという点に、最小限度の潔癖さが窺える。というのも、以下に見るように、「前科者の活用」は刑事探偵の否定的イメージの中でも最たる要素なのである。

⁸ ウラジーミル・プロップ (斎藤君子訳) 『ロシア昔話』せりか書房、1986年、262-264頁。

3-2. ワーニカ・カイン

18世紀に実在した探偵ワーニカ・カインは、まさに前科者の探偵として、ロシアに長く語り継がれているフォーク・ヒーローである。マトヴェイ・コマロフは当時存命中だったカイン本人に取材したほか、生前から既に語り草になっていた彼に関する評判を収集して、『1775年モスクワにて M.K が記す、ロシアの悪漢盗賊にして元モスクワ探偵ワーニカ・カインの善行および悪行、その全生涯と数奇な行状の精確な記載』を書いている。その記述ではカインは盗賊として長年の間遍歴を続けた後、元老院議官クロボトキン公爵に以下のようにして売り込みを図る。

「私は泥棒にして追剥ぎでございますことをまっすぐに白状いたしますが、モスクワのみならず他所の町の泥棒追剥ぎどもを多数見知っております。お慈悲を以って私の罪状をお赦しいただき、十分な人手をお貸し願えますならば、その多数の者たちを召捕って御覧にいたしましょう」。公爵はカインにウォッカの杯を取らせ、兵士用マントを授けると、探索庁に捕物の要請を出して、この者が示すところの泥棒追剥ぎどもを捕えるため、来る晩に然るべく人員を手配するよう指令した。⁹

そうして探偵として取り立てられたカインの活躍ぶりは、以下のようなものであった。

多くの遊び人たちが、その大部分は工員くずれであったが、彼の許に出入りして自分を売り込み、庇護を当てにした。彼はそのような連中を鷹揚に受け入れて、13人以上も自宅に居候させた。彼らはスパイとしてモスクワを徘徊しては、様々な手段で胡散臭い者たちに探りを入れてカインに報告していたが、一方で自分たちもまた数々の悪事を働いて、絹布、時計、煙草入れやその他手当たり次第に掠め取り、カインの許へ持ち込むと、彼がその一部を取って、残りを悪党連中に下げ渡した。時々盗品が持ち主に返されることもあり、彼が部下を使って捜し出したということにして、褒賞や少なからぬ謝礼にありついたのであった。¹⁰

以上のようにワーニカ・カインは典型的な前科者の探偵であり、ヒーローとアンチヒーローの要素が混在する刑事探偵像の最初期の原型として語り継がれている、ロシア文化上の一形象なのである。

3-3. プチャーリン

ロシアの伝説的名探偵としてはもう一人、1866年に創設されたペテルブルグ刑事警察の初代長官プチャーリンが知られている。当時の著名な法律家 A.Φ. コーニは、プチャーリンが殺人現場の痕跡からの確に犯人像を推理して見せたり、巧みな話術で容疑者の口を割らせた逸話を紹介する一方で、彼に関する評判には、名声だけでなく悪評も付随していたことを明かしている。

⁹ *Комаров М.К.* История мощеника Ваньки Каина // Милорд Георг. СПб., 2000. С. 53.

¹⁰ Там же. С. 57.

ペテルブルグ刑事警察長官イワン・ドミートリエヴィチ・プチャーリンは、老獺なペテルブルク特別市長官 Ф.Ф.トレーポフが見事に抜擢し、それに劣らず見事に手綱を握った有能な人物の一人であった。刑事警察に参加する以前のプチャーリンの活躍にはしばしば、本人も隠そうとしないが、合法性と倫理的厳正さにおいて極めて危なっかしいものがあった。トレーポフが特別市長官職を退いた後、プチャーリンの放任が、一部の部下たちの行状ゆえに大々的な非難を招くこととなる。¹¹

プチャーリンに対する当時の非難の一例として、ペテルブルグのサロンの女主人として社交界に君臨したアレクサンドラ・ボグダーノヴィッチの日記には、次のような記述がある。

(1889年) 5月20日 [...] アルダシェフ来訪。前ペテルブルグ刑事警察長官プチャーリンについていろいろと興味深い話を聞かせてくれた。何という下劣な人間だろう！ ひどい汚職役人。オフシャンニコフという債務不履行者が病気を患っていたにも関わらず、報告を握り潰し、事情を把握していない署長の指示で拘束され24時間留置されたそう。どれほど長い間この男が権力を貪っていたことか！ 彼の後任には酷吏と評判のヴィノグラードフが任命された。彼はかつて様々ないかがわしい行為で起訴されたことがある。どこかの管区の署長が彼に賄賂を出さなかったら、彼はペテルブルグの泥棒たちにこの管区を荒らさせ、一日もしないうちに3、4件の押し込み強盗事件が発生したという。こんな男が現長官だとは！」¹²

ただし、文芸ヒーローとしてのプチャーリンは異なる風貌を帯びている。20世紀初頭、プチャーリンを主人公にして出版された大衆読物(1908)では、プチャーリンに関する悪評は影も形もないばかりか、肯定的ヒーローとしてのプチャーリンの人物像が強調されていた。

プチャーリンは極めて敬虔な人間(человек в высокой степени религиозный)だったので、霊柩車両の前で脱帽した。[...] 高潔な天才的人間(талантливые, благородные люди)の常として、感傷的な好人物(чувствительный и добрый)である彼は喪服の婦人に衷心からの哀悼の念を示した。¹³

ちなみに同様の美化現象は、20世紀初頭のロシアで出版されたもう一つの大衆読物の主人公ナット・ピンカートンにも窺うことが出来る。実在のモデルであるアラン・ピンカートンにまつわる悪評を排して、肯定的ヒーローとしての面を強調する傾向を、ジェフリー・ブルックスは以下のような皮肉な調子で指摘している。

米国の人名や地名を駆使することは作者にとってまったく苦にならなかったようで、作中には往々にして米国的というよりむしろロシア的な光景が表れている。ハドソン河の海賊に財産を狙われた資本家がピンカートンを頼ってきたとき、探偵が最初に発する質問は、労働争議を

¹¹ Шурыгина И.И. (ред.) Русский сыщик И.Д. Путилин. М., 1997. Т. 1. С. 263.

¹² Богданович А. Три последних самодержца. М., 1990. С. 113–114.

¹³ Роман *Добрый* (Антропов Р.Л.) Гений русского сыска Иван Домиториевич Путилин: Гроб с двойным дном // Русский сыщик / ред. И.И. Шурыгина. М., 1997. Т. 2. С. 193.

鎮圧した実在のピンカートンとは思えないものだった。「あなたは雇い人たちに過酷な仕打ちをしたり、給金を出し惜しんだりしていませんか?」。ピンカートン家とその組織について多少なりと知っている者なら、この行を読んで失笑を禁じえないだろう。もっともこの質問は 1905 年以後のロシア情勢をよく反映している。¹⁴

3-4. その他の 19 世紀モスクワ刑事探偵にまつわる巷談

帝政末期からソヴィエト時代初期にかけて活躍したルポルタージュ作家ギリャロフスキーによれば、モスクワに刑事警察が創設されたのは 1881 年のことだった。

それまで一応その方面の担当刑事と見られていたのは、わずかに二人の区警察署長—ザマイスキーとムラヴィヨフだけで、彼らは大勢の泥棒を手下につかっていた。手下は小さな窃盗を見逃してもらうかわりに、大きな犯罪を発いたり重要犯罪人を逮捕したりする役目を負っていたのだ。この二人のほかにもう一人、当時刑事として名を馳せた人物にスモーリンがいた。ひげを剃りあげたがっしりした体格の老人で、いつも最重要事件を担当していた。スハレフカは彼の活動領域の中心で、そこから彼はいたるところに網を張りめぐらし、あらゆる情報をひとり握っていた。《スハレフカ総督》が彼の異名である。[…] 彼は誰も恐れてはいなかった。強盗たちが彼をまもって周囲を固めていたからだ。それはちょうど、可能なばあいに彼が強盗たちをまもってやったのとよく釣り合っていた。[…] 泥棒や強盗と親交を結び、とくにいかさま賭博師とは仲がよく、賭博場にやっても、誰も彼に気兼ねする者はいなかった。彼の知らないことはなかったし、見落としたこともなかった。ただし、一言も漏らさなかった。しかし、もし上司から何か大きな盗みについて、とくに著名人からの盗みについて捜査せよと命ぜられたときには、必ず捜し出した。それも、強盗たちがすすんで密告し、仲間を突き出すのだった […] スモーリンは何でも知っている。それも、どこで何が起こったかではなく、いつどこで何が起こるかということまで知っている……。¹⁵

3-5. ロシアに知られた欧米の伝説的刑事探偵

伝説的な探偵像が否定的なイメージを伴っている例は、ロシアだけでなく同時代の欧米諸国にも見受けられる。またそのような欧米諸国の探偵に関するフォークロアは、ロシアでも知られている。ソヴィエト時代初期のモスクワ警察幹部を主人公に設定した、クラーロフの『捜査 Розыск (1976–1982)』シリーズには、「前世紀の末から刑事警察に勤めていた古参刑事」が、上司である主人公に少年期の回想を打ち明ける場面があるが、そこでは欧米警察史上の伝説的人物の名が列挙されている。

「私は高等中学校で捕物ごっこの空想に耽っていました。六年生の頃にはもう平の探偵なんかじゃなく、特捜班長フランソワ・ヴィドックになりきっていましたよ。彼のように、初め私は泥棒でしたが、ナポレオン一世政府に売り込みます。「犯罪を克服できるのは犯罪者しかおり

¹⁴ Jeffrey Brooks, *When Russia Learned to Read: Literacy and Popular Literature, 1861–1917* (Princeton, NJ: Princeton University Press, 1985), p. 144.

¹⁵ B.A. ギリャロフスキー (村手義治訳) 『帝政末期のモスクワ』中公文庫、1990 年、87–95 頁。

ません」そう言って私は12人の前科者を部下に従えて、一年のうちにパリの殺人犯や押し込み強盗や泥棒を一千人近く捕えました。[...] 七年生になった頃には、同級生たちがラテン語文法の活用変化に取り組んでいるのをよそに、私はロンドンの治安判事ジョン・フィールディングになって、ロンドンの前科者三千人を声で聴き当てる盲目の名探偵をやっていました。それからアラン・ピンカートンにもなりました。全米探偵社を開設し、大きく見開いた目を描いたシンボルマークに「我々は決して眠らない」という標語を付けまして。その頃の私は数え切れない犯罪者を捕縛して、リンカーン大統領暗殺計画を暴き……」

ボーリンははっとして黙り込んだ。調子に乗って喋り過ぎたと思ったらしい。官僚的無愛想は氷解し、感傷的なばら色の思い出となって流れ出たのだ。

「それで、高等中学校を出てからは誰になったんだい、ピョートル・ペトロヴィチ？」私は訊ねた。「ベルティオンかな？ それともフーシェ？」

「外れです」彼は首を振った。「高等中学校を出た私は、賄賂を取らない真面目な警察官を演じました。つまらない役柄になったものじゃありませんか？」

「それは言えるな」私は同意した。「でも斬新じゃないか。私の知る限り、ヴィドックもピンカートンも、そういう役は演じたことがない。君がその役に飽きることがないよう、希望するよ」¹⁶

パリ警視庁探偵ヴィドック、ロンドン・ボウ街区治安判事フィールディング、米国私立探偵ピンカートン、「前科者身体測定記録システム」の考案者ベルティオン、フランス警察大臣フーシェは、いずれも職業的犯罪者に関する豊富な情報知識を捜査に活用したことで名高い人物である。

同じ19世紀人としてプーシキンとゲルツェンは、ヴィドックおよびフーシェに関して次のような評言を残している。

先日の『文学新聞』で、パリの不浄役人による「手記」について書かれていた。政治探偵ヴィドックの道徳的著作は、興味深いと同時に忌むべき代物である。思い浮かべてみてほしい、根無し草の無宿人で、密告によって日々の生計を立て、商売用の監視下に置かれている哀れな人々の中から嫁を取る、札付きのペテン師で、恥知らずの上の下劣な人間を。そのような人間による道徳的著作とはどのようなものか、想像できるものならばして見てほしい。¹⁷

秀れた警察的才能を持っていたナポレオンは自分の将軍たちをスパイや密告者に仕立てた。リヨンの死刑執行人たるフーシェは、地方の長官たちを通じて、また彼らとは別に、墮落した女たちや墮落していない商店の女将や、召使、御者、医者、床屋などを通じて、完全なスパイ制度の完璧な理論と体系と科学とを創設した。ナポレオンは失脚したが武器は遺った。武器だけではない。武器を持った人間も残った。フーシェはブルボン王朝の側に移った。¹⁸

¹⁶ *Кларов Ю.М.* Розыск: роман-диалогия. Киев, 1991. С. 63–64.

¹⁷ *Пушкин А.С.* Полное собрание сочинений в 19-т. М., 1994-1997. (Репринт. Полное собрание сочинений в 17-т. М.-Л., 1937-1959). Т. 11. С. 129.

¹⁸ *Александров Г.М.* (金子幸彦・長縄光男訳) 『過去と思索 (2)』、筑摩書房、1999年、342–344頁。

とりわけフーシェに整備された近代フランス警察そのものに関して、ロンドン警視庁創設以前、1811年の英国においても、以下のような悪評が語られている。

効率的な警察制度はどうすれば伝統的な英国人の自由と両立しうるのか？ 英国人によく知られた唯一の警察であるフランス警察は、恐怖政治の手先として悪名をはせていた。そして、専制政治を導入する危険を冒してまで改革を迫る覚悟のある人間はまずいなかった。十二月二十七日、ラトクリフ街道の恐怖が最高潮に達していたときでさえ、ジョン・ウィリアム・ウォードは友人にこう書くことができた。

—「パリには称賛に値する警察があるが、市民はそのために高価な犠牲を払っている。家宅捜索、密偵、その他すべてのフーシェ氏の発明品の犠牲になるよりは、ラトクリフ街道で三、四年ごとに半ダースの喉がかき切られるほうがましというものだ。」¹⁹

3-6. 概括

探偵によるスパイ的な捜査活動、またそのようないかがわしい探偵を活用する治安組織そのものに対する、伝統的な悪評については、現代ロシアの元警察幹部が以下のように総括している。

ロシア社会では伝統的に、治安機関の非公然情報提供者に対して極めて否定的な態度が形成されている。特務機関への協力は、大部分のロシア一般市民から不名誉な事と見なされている。法学者や弁護士の中には、治安機関に「非公然エージェント」の起用禁止を求める声もある。というのも「エージェント」の行状は専ら、人々を犯罪へと挑発したり、捏造の情報をもたらしたりといった事に始終するからだという。

同様の見解は国家権力機構の活動に対する、おびただしく蓄積された国民の否定的な態度の中にも生成されている。とはいえエージェント制度は全世界諸国における警察・防諜機関の機能を支える一基盤である。相異が見られるのは通報者の活動に対する法的保証、その権利と義務、労働報酬の規定、等々といった問題くらいである。²⁰

¹⁹ P.D.ジェイムズ、T.A.クリッチェリー（森広雅子訳）『ラトクリフ街道の殺人』国書刊行会、1991年、262頁。

²⁰ *Говоров И.В. Негласная агентура советской милиции в 1940-х годах // Вопросы Истории. 2004. № 4. С. 109.* 1860年に刑事事件の取り調べは、しばしば粗暴なふるまいに出た警察の手から予審判事という審問にあたる判事の手に移された（ロナルド・ヒングリー（川端香男里訳）『19世紀ロシアの作家と社会』中公文庫、1984年、247頁）。すなわち予審判事は本来、それまでの刑事探偵とは一線を画す清廉な存在となることが期待されていたわけであるが、チャーホフの『狩場の悲劇 *Драма на охоте* (1884)』やアムフィテアトロフの『裁き *Казнь* (1885)』、現代ではトーボリの『赤いパイプライン *Красный газ* (1984)』など、何故か「犯罪に手を染める予審判事」の物語が繰り返しロシア小説に現れ続けている。予審判事の犯罪は現実にも起きていて、例えば19世紀にはトルストイの中編小説『悪魔 *Дьявол* (1890)』の基になった「フリードリフス事件」が知られている。トゥーラの予審判事 Н.Н.フリードリフスは、本来好人物だったが優柔不断なところがあった。トゥーラの辻御者の妻でクチノ村出身の農民スチェパニーダ・ムニツィナヤと関係を持ち、その後で器量は良いが鈍感なところのある妻を娶った。フリードリフスの家族には、彼がスチェパニーダと相思相愛で、妻のことをそれほど気に掛けていないのを知っただけに、この結婚は奇

悪評もあるが、治安上欠くことのできない有用な存在としての探偵のイメージ及びその具体的事例は、古くからロシアに存在しており、その歴史は近代欧米諸国における類例とほぼ並行していたとはいえ、ロシア独自の原型と社会的土壌から発したものだ。

4. 刑事探偵 - スパイ - 肯定的ヒーローのイメージ

ワイネル兄弟の『恩恵の時代』において既にその例が現れていたが、刑事探偵のイメージに付随する否定的要素も、場合によっては肯定的イメージに反転することがある。例えば以下に示すソヴィエト時代の探偵小説作品を現在の視点から参照してみると、集合的意識や社会事情といった、イメージの反転を促す媒体が露骨に顕在化して見えてくる。

4-1. アダモフ『まだら事件』

アルカージー・アダモフの『まだら事件 Дело пёстрых (1956)』は、ワイネル兄弟より以前に、戦後モスクワのギャングに挑むソヴィエト刑事探偵の肯定的イメージを提示してみせた先駆的作品であった。この作品は、以下のような梗概の連作短編集である。

第二次世界大戦から復員した青年セルゲイ・コルシュノフは、その軍功によりモスクワ警察犯罪捜査部の刑事に採用される。折しも首都で頻発する様々な凶悪事件から、その背後で犯罪者たちを仕切る「親爺」と呼ばれる黒幕の存在が浮上していた。当局は「親爺」に操られた雑多な者たちによる多種多様な一群の事件を「まだら事件」と名付け、特捜班を設置する……。

この連作短編集第六話「不審な住人」では、特捜班のロバノフ刑事が民生局職員を装って、「親爺」の手先の一人が住んでいると推測される共同住宅の住人を訪問調査する。共同住宅の住人はワレフスカヤ未亡人とクプツェヴィチ夫妻という3人の年金生活者、それにワレフスカヤの住居を間借りしている女学生カーチャ・スヴェトロワだった。その中でクプツェヴィチが怪しいと睨んだ特捜班は、コルシュノフをカーチャ嬢の兄として同居させ、クプツェヴィチを監視させることにする。

ここで主人公の刑事たちは明らかに民間人に対する組織的なスパイ活動を展開しているが、犯罪容疑者を対象にしたその行為は当然ながら、決して否定的なイメージを伴ってはいない。それどころか、カーチャ・スヴェトロワが当局から捜査協力を要請される場面で

異に映った。結婚から三ヵ月後、H.H.フリードリフスは脱穀作業中のスチェパニーダの腹部を拳銃で撃って殺害した。動機はスチェパニーダに対する妻の狂おしい嫉妬に悩まされたため。医師団は彼が旋毛虫に冒されており、心神喪失状態で犯行を行ったと診断し、トゥーラの陪審は彼を無罪とした。しかし良心の呵責が殺人者を激しく苦しめた。彼はすっかり人が変わったようになって、あらゆる齋戒を厳守し、よく祈祷を捧げ、しばしば抑鬱症に陥った。事件から二ヵ月後の1874年12月、姉妹の許からトゥーラを出立した彼は、ジトワ駅に差しかけたとき、列車に撥ねられて轢死した。状況には不明な点があったがフリードリフスは極度の近眼であった（眼鏡を常用していた）し、激しい吹雪で防寒頭巾を被っていたため、列車が迫る音が聞こえず偶発的に起きた事故、と見ることは一応可能だった。Толстой Л.Н. Полное собрание сочинений в 90-т. М., 1935–1964. Т. 27. С. 718.

は、それが名誉ある使命として語られている。

「この依頼は、はっきり申し上げて難題です。しかし我々同志たちは審査の結果、あなたなら出来ると判断しました。あなたはしっかりした娘という評判だ。この依頼は重大なもので、これを遂行するのは、共産党員子女としての、また市民としての義務なのです。」

「わかりました。用件を聞かせてください」カーチャはもどかしそうに言った。

「その前にお断りしておく必要があります。この依頼を受ける意思の有無に関わらず、ここで話し合われた内容を他言することは絶対に許されません。約束できますか？」

「もちろんです。共産党員子女の名誉にかけて」²¹

さらにロバノフはじめ何人かの刑事たちは、「親爺」一味の逮捕に際して重傷を負いながらも気力を振り絞って犯人確保を成し遂げるなど、自己犠牲的な英雄精神を発揮する。

4-2. 刑事探偵と諜報員のイメージ的近似性

自己犠牲的な英雄精神を発揮して使命に邁進するフォーク・ヒーローとしては、探偵小説作家ユリアン・セミョーノフのスパイ小説作品『春の十七の瞬間 Семнадцать мгновений весны (1968)』の主人公スティルリッツが国民的人気を博している。

1999年、雑誌「Коммерсант-Власть」5月11日号で「あなたが次期大統領に選びたい映画作品主人公は？」というアンケート企画が行われた際にも、2つのリサーチ会社による調査結果で、いずれもジェグロフとスティルリッツがともに上位に挙がった。

ВИЦОМ 社によるアンケート結果上位

- 第1位：ピョートル一世（『ピョートル一世』シーモノフ）
- 第2位：グレーブ・ジェグロフ（『待合せ場所を変えてはならない』ヴィソーツキー）
- 第3位：ジューコフ元帥（『解放』ウリヤノフ）
- 第4位：スティルリッツ（『春の十七の瞬間』チーホノフ）
- 第5位：イワン雷帝（『イワン雷帝』チェルカソフ）

РОМИР 社によるアンケート結果上位

- 第1位：ジューコフ元帥
- 第2位：スティルリッツ
- 第3位：グレーブ・ジェグロフ
- 第4位：ゴーシャ（ゲオルギー）（『モスクワは涙を信じない』バターロフ）
- 第5位：シャーロック・ホームズ（『ホームズとワトソン博士の冒険』リヴァーノフ）²²

ジェグロフとスティルリッツ—国民的人気を分かち合う二つのヒーロー像を考察すると、

²¹ Адамов А.Г. Избранные произведения в 3-х томах. Т. 1. М., 1986. С. 128.

²² Коммерсант-Власть. 1999. № 18. С. 12.

「刑事探偵」と「政治諜報員」のどちらを描いた作品も一様に「探偵小説 детектив」として分類される、というロシア娯楽文学のジャンルの事情の他にも、両者にはイメージ的な近似性が見受けられる。

刑事探偵をめぐるイメージにおいては、出自の怪しさや、変装による潜入捜査など、しばしば権力を帯びて「探り出す者 сыщик」としての不気味さや非情さが意識されることがあり、そのことが実在の刑事探偵に関する否定的イメージの源泉ともなり得ているのであるが、一方でスティルリッツのようなスパイ・ヒーローがそうであるように、不気味で非情な環境に身を晒しつつ、これを克服しながら社会に献身する者として、肯定的イメージを獲得することも可能である。

これはロシアに限定される現象ではなく、例えばわが国初の探偵小説とされる黒岩涙香の『無惨』（1889）にも、刑事探偵 - スパイというイメージの両義的評価が表れている。

刑事巡査、下世話に謂う探偵、世に是ほど忌わしき職務は無く又之れほど立派なる職務は無し、忌わしき所を言えば我身の鬼々しき心を隠し友達顔を作りて人に交り、信切顔をして其人の秘密を聞き出し其れを直様官に売付けて世を渡る、外面如菩薩内心如夜叉とは女に非ず探偵なり、切取強盗人殺牢破りなど云える悪人多からずば其職繁盛せず、悪人を探す為に善人を迄も疑い、見ぬ振をして偷み視、聞かぬ様をして偷み聴、人を見れば盗坊と思えちよう恐き誠めを職業の虎の巻とし果ては疑うに止まらで、人を見れば盗坊で有れかし罪人で有れかしと祈るにも至るあり、此人若し謀反人ならば吾れ捕えて我手柄にせん者を、此男若し罪人なら我れ密告して酒の代に有附ん者を、頭に蠟燭は戴かねど見る人毎を呪うとは恐ろしくも忌わしき職業なり立派と云う所を云えば斯くまで人に憎まるるを厭わず悪人を看破りて其種を尽し以て世の人の安きを計る所謂身を殺して仁を為す者、是ほど立派なる者あらんや²³

5. 組織犯罪のフォークロア

これまで、イワン雷帝からジェグロフに至る、ロシアのフォーク・ヒーローとしての探偵像を概観してきたが、最後に『恩恵の時代』のモデルとなった「黒猫事件」をめぐるフォークロアについて触れておきたい。「黒猫事件」は第二次世界大戦後間もないソ連各地で噂話として流布した、架空の「黒猫」団にまつわる都市フォークロアに触発されて発生したものであり、子供の悪戯から実際の強盗行為まで、大小様々な事件が含まれる。首都モスクワでは1945年の11月から12月にかけて、この現象が最盛期を迎えていた。

²³ 『日本探偵小説全集1』創元推理文庫、1984年、16-17頁。主人公が作中で「東洋のルコックになる可し」と称揚されている点から、この作品の刑事探偵像にはガボリオの「ルコック探偵」のイメージが投影されている可能性もあり得る。「ルコック探偵」を中心とした、フランス大衆文学史上の刑事探偵イメージに関して、次の文献が示唆に富む考察を展開している。小倉孝誠『推理小説の源流——ガボリオからルブランへ』淡交社、2002年。

1945年

11月

5日 第二馬車道通り 29番館の玄関口で「黒猫」の描かれた脅迫状が見つかる。「声明 家宅突入に際して住民は抵抗しないこと。従わねば相応の措置を取る」。さらに5軒の「対象」を挙げて「仲間の生命を脅かそうとすれば殺す」「零時までは諸君の物、零時以後は我々の物」「心して待機せよ」と添え書き。後に第 665 小学校に通う少年達の仕業と判明。

12月

1日 B.A.グリブコフ、「黒猫」の一味を自称して強盗傷害事件を起こし逮捕。

7日 チュフェレフ大通り 4番棟 29号ゴリベルグ某宅の郵便受けに「黒猫」団の脅迫状。「来訪を待て。会えるのを心待ちにしている。黒猫」。

8日 リュブリノ市のチェルヌイシェフ某宅で強盗事件。「黒猫」一味を自称する E.C.リブチェフ（もしくはリクチェフ）、B.A.ナザロフ、A.3.および C.3.クラスニヒン兄弟ら逮捕。

11日 クリュコフ通り 20番館の掲示板に「黒猫」の脅迫状。「9時まで外套は諸君の物、9時以後は我々の物」。

13日 三条小路 52/1番館の玄関で「黒猫」の署名を添え、新聞紙に包まれた男性の右親指が発見される。

14日 ウサチョフ通り 29番館第7棟の A.A.フリプノフ宅に強盗が押し入り、「黒猫」の署名を残す。後に H.Д.グサコフ、B.A.ジガノフ、Л.Д.ノヴォジロフ、H.A.シニツィン、B.И.プルレトフ（フルレトフ）の5人が逮捕。

同日 クロトフ某中佐の郵便受けに投書。「黒猫分隊より ごきげんよう戸主殿！ 黒猫先発隊は貴方に B.ムィティシチンスク通り 58番商店の玄関下に 3千ルーブルを置き去るよう勧告する。無謀にも届け出るならば命は無い。心せよ。乱心せぬように 黒猫」

15日 П.А.ヴァイスベイン宅の郵便受けに「神は公平な分配をお命じになる」と上書きされた封書。黒猫の描かれた書面に「人的被害を避けるため、明晩 10時までに住居から退避することを勧告する」

同日 トゥシノ市ポフロフ - グレボフ団地の P.Д.ヘルソンスカヤ宅で強盗事件。現場に「ガリクは黒猫の一味」という声明。後に A.M.ペデシュおよび Д.В.クルイシンを逮捕。

16日 第 300 木製品工場の壁に「盗賊および殺し屋募集 黒猫団 猫に注意しろ」と記した板切れが張られる。12、13歳の少年達の仕業と判明。

17日 カリヤーギン某宅で強盗事件。「ハリコフの黒猫」団を自称する主犯 B.И.オルロフおよび三人の若者 H.И.グジェリツェフ、B.A.コチェトコフ、H.И.ブルミストロフら逮捕。²⁴

元モスクワ内務総局長ウラジーミル・フォードロヴィチ・チヴァコフは、「黒猫事件」の背景について以下のように回想している。

……あの商店長の奴、ちょっと考えてみてください、ぼくらの親父たちは皆、徴兵されたというのに、奴は健康な成人のくせして内地でのうのうと過ごしやがって……恐れるものはなにもないといった風情でした。それで奴が憎たらしくて。当時モスクワっ子が何より怖がっていた

²⁴ Тарасов А.Д. О черной кошке без мифов // Родное Подмосковье. 2003. № 23. [http://rpgazeta.ru/index.php3?path=_kriminal&source=23_01] 2004年9月17日閲覧。

ものがわかりますか？

—見当はつきます。

「黒猫」です。だから誰かを脅かそうと思ったら、そいつの戸口にこの忌わしい代物を描き込んでやればよかったわけです。私もやってやりましたよ。

—すると、ギャング自体は実在しなかったのですか？

実在はしました。ただ噂されていたような大したギャングではありませんでした。

—それにしてもどこから噂が出回ったのでしょうか？ 誰が広めたのでしょうか？

人々が自発的に広めたのです。何がこれらの噂を生んだかといえば、雰囲気です……スターリン時代の雰囲気といえば、秘密主義でした。あらゆるものが機密とされていて、パンが3斤も盗まれるようなことがあれば、軍事機密でした。

—それはどうしてですか？

それは……確か1934年ごろ、当時の法律家で後の学士会員トライニンの有名な論文が発表されたのです。その趣旨は、囚人たちを動員したことで知られる白海運河建設事業が完成したことにより、凶悪犯や売春婦など未発達分子の再教育の大実験も確立されたというもので、それに絡めて、もはや凶悪犯、そしてとりわけ売春婦はソ連邦に存在しないと説いたのです。一件落着、というわけで、その時以来あらゆる強盗などの犯罪は「機密事項」の判を押されるようになりました。売春行為も同様です。

—その結果はどうになりました？

そうして警察の活動全般が部外秘になりました。唯一、ミハルコフの「スチョーパおじさん」だけは、その活躍ぶりを語る事が許されましたが。²⁵

—信じ難いことです。

—連の秘密主義で一番困ったのはソヴィエト映画界だった、ということは了解できますか？
—どういうわけで？

国内に犯罪は存在しないという以上、ソヴィエト犯罪映画を撮るなど論外です。だからソヴィエト探偵映画が世に出たのはスターリンの死後、1957年のアルカージョー・アダモフ原作のものが最初でした。それからようやく、非公然ながらわが国にも凶悪犯罪が存在することが知られるようになりました。勇敢なソヴィエトの探偵たちがそれらを根絶しましたよ。そしてその時からソヴィエト探偵の理想像が形成されたのです。[…]

当時の大衆感情が、押し込み強盗に先立って戸口に猫を描くギャングの話を広めました。現在では誰の目にも荒唐無稽だということがわかりますが、当時、特に大戦後、モスクワの治安が悪化しきっていた頃の人々には、凶悪な盗賊の存在が実感を伴って信じられたのです。このギャングの噂はモスクワ住人たちの間で戦後ほぼ10年間近く語られていました。私のような当時の悪童が、この神話に実体を与えたと言えます。お伽噺を実話にするのに貢献したわけです。²⁶

上記の回想からも窺えるように、ソヴィエト時代を通じて組織犯罪は微妙な話題であり

²⁵ セルゲイ・ミハルコフの児童物語詩『スチョーパおじさん (Дядя Степа. 1935)』の主人公。大男の豪傑で、後に書き継がれた続編で警察官となって活躍する。ソ連の肯定的警官イメージの主要な源泉となっている、もう一人のフォーク・ヒーローである。

²⁶ Минченко Д. Настоящая «Чёрная кошка» // Огонёк. 2003. № 5. С. 50–51.

続けた。組織犯罪の存在に関して当局関係者が初めて公式に認めたのは、ペレストロイカ期の1988年、『文学新聞』に掲載されたグーロフ民警大佐（当時）のインタビュー記事においてである。²⁷

ワイネル兄弟の『恩恵の時代』が執筆された1970年代当時には、ソ連において組織犯罪といえば、わずかに探偵小説の中にだけ存在が認められる、お伽噺のようなものであった。上記の『文学新聞』の記事においても、インタビュー記者は「ほんの五年前まで（五年間とは早いものですね！）、わが国におけるマフィアの存在について問われたソ連内務大臣は、呆れたように眉をひそめて『探偵小説の読み過ぎですね』と憐れむような薄笑いを浮かべたものです」と述懐している。

結び

『恩恵の時代』の中で冤罪の被害者グルジェフが、黒猫に関する以下のような警句を述べる場面がある。

昔の中国の賢人で孔子という人物が、こんな言葉を残している：暗い部屋の中で黒猫をつかまえるのはとても難しい。黒猫が実在していなければなおさらだ。²⁸

²⁷ アレクサンドル・イワーノヴィチ・グーロフ民警将軍は1945年タンボフ州に生まれ、1967年に警察官となり、1974–1978年にかけてソ連内務省犯罪捜査本局に勤務した後、内務省学術院で組織犯罪について研究。1988年ジャーナリストのユーリー・シチュコンヒチヒンとのインタビュー記事でソ連マフィアについて言及したことが大きな社会的反響を呼んで名声を博し、内務大臣バカーチンによって組織犯罪対策本部長に任命される。1990年よりロシア共和国人民代議員を兼任。1992年内務大臣エリンとの不和がもとで保安省に移籍したが、1995年内務大臣クリコフの招きに応じて内務省に復帰した。趣味はガーデニングで、モスクワ郊外に自家庭園「スコットランド・ヤード」を所有している [<http://www.duma.gov.ru/csecure/deputat/gurov.htm>] 2007年3月20日閲覧。

ちなみに探偵作家ニコライ・レオノーフの人気作品「グーロフ刑事」シリーズの主人公の名前はレフ・イワーノヴィチ・グーロフであるが、このレフ(Лев)・グーロフ刑事と実在のグーロフ将軍には興味深い符合がある。後者が名声を博する契機となった『文学新聞』の記事は、彼の往年の武勇伝にちなんで「ライオンが飛び出した！ Лев прыгнул!」と題され、以下のような文章で結ばれていた。

いま記憶に引っ掛かるものを感じている読者もいることだろう。「グーロフ、グーロフ……聞いたことのある名前だ」と。まだ思い出さないだろうか？ かつてその名はソ連中の新聞で報道され、彼の行為をめぐって激しい論議を引き起こしたものだ。当時まだ上級中尉だったアレクサンドル・グーロフは、モスクワ都心部の小学校校庭で居合わせた人に「じゃれついた（当時の新聞の表現）」人気者のライオン“キング”を射殺したことがある。だが私が今この逸話を思い起こしたのはにはわけがある。

「アレクサンドル・イワーノヴィチ、マフィアをライオンに例えるならば……ライオンは飛び出る機会を窺っているのでしょうか、それとも既に飛び出したのでしょうか」

「ライオンは飛び出しました」（Щекоцихин Ю. Лев прыгнул! Диагноз: организованная преступность. Преведены первое исследование // Литературная газета. 1988. № 29.)

²⁸ Вайнер А., Вайнер Г. Эра милосердия. С. 285.

この警句は孔子の言葉として伝えられているが出典不明であり、一方でチャールズ・ダーウィンにも類似の"A mathematician is a blind man in a dark room looking for a black cat which isn't there."（数学者というものは暗い部屋の中で居もしない黒猫を探し回る盲人のようなものだ）という警句が伝えられている。

その意味するところと同様、本源を探し求めても捉えどころがないまま独り歩きをしている、所謂「翼の生えた言葉 крылатые слова」であるが、この捉えどころのなさそのまま「黒猫事件」の噂話にも当てはまる。

またソヴィエト時代において、ただでさえお伽噺の存在と見なされていた組織犯罪を題材にし、しかも「黒猫」団の噂話をモデルにして創造されたワイネル兄弟の『恩恵の時代』は、二重の意味でフォークロアから生み出された作品であった。

この作品自体が更にジェグロフ大尉というフォーク・ヒーローを生み出したことを考え合わせると、『恩恵の時代』という作品は、ソヴィエト時代の社会不安を表象した古いフォークロアから発生して、この社会不安を物語の中で解決してみせ、現在に至るまで通用している理想的刑事探偵像という新規のフォークロアを生成させた、一種の媒介装置としての機能を発揮したと言える。

ジェグロフ以後も、両義的なイメージを帯びた印象的な刑事探偵像は、『恩恵の時代』の衣鉢を継ぐ作品と目されているキヴィノフの『街路灯が点らない街 Улицы разбитых фонарей』シリーズ（ドラマ化されたタイトルは『デカたち Менты』）の他、マリーナやアクーニン等による、現代ロシアの人気探偵小説作品群の中に垣間見ることができる。

このように、ロシアの刑事探偵をめぐるイメージとその歴史は、都市フォークロアとしても興味深い様相を呈しているが、必ずしもロシアだけに限定される現象ではなく、国際的視野に立った展望の可能性が開かれている。「文学と社会」という観点からも、さらに興味深い研究の可能性が見込まれる。²⁹

²⁹ 本論は科学研究費補助金 奨励研究 18903017 成果に基づく。